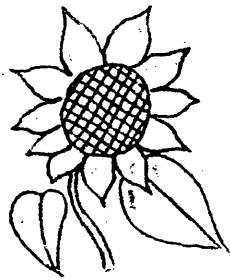


1965年度食物学会北海道・東北旅行記



京都 → 十和田 (出発)

1班 大食3
(鶴丸, 深町, 古味)

7月15日 (第1日目)

13:00 京都駅八条口集合

炎天下の暑さもどこ吹く風と、ハイヒールの足さばきも軽やかに、大荷物をかかえて三々五々に集まつて来る淑女の群れに、殺風景なビルもたちまちお花畑と化してしまった。全員集合。出発の約30分前、交通公社のお兄様(岡本正昭氏)に誘導されて新幹線構内に入り列車を待つ。

工藤先生、中原のおばあちやま……その他各研究室御一行様の盛大なお見送りを受ける。右を見たり左を見たり日頃のすました態度も今日ばかりは落ち着かず「こだま号」のお出ましを今か今かと待っている。

行つてらつしやい。と手を振つて下さる諸先生方の笑顔の中に私達、皆んなが無事故で帰つて来る事を祈つて下さっていたことでしょう。

13時54分 京都駅発

北海道の涼ならぬ車内の涼は心地よかつた。停車毎にホームに降りて愛するこだま号と写真をとる人、大気をお腹一杯吸つてくる人、ウォータークーラーまでマラソンをやる人、かれこれするうちに4時間半余りで早くも東京到着。

18時30分 東京 — 上野

人・人・人の東京駅。交通公社のお兄様の適切な誘導のおかげで、どうにか上野駅まで着いた。「もう疲れてしまった。」なんて声が聞こえて来ました。これからだと言うのにネ。

20時50分 上野 — 盛岡

鈍行夜汽車に大騒動で乗り込む。女性の友情たるものは恐るべきもので、お兄様の忠告もむなしく友の座席確保に大奮闘。さんさん騒いだ後ようやく落ち着いて淑女からジャジャ馬に早がわり。おしやべり、車内散歩、読書、バリバリ、ポリポリ……。いつしか、に

ぎやかだつた車内も列車の規則正しい振動を子守歌に、間もなく1人、2人と夢の国へ。

7月16日 (第2日目)

11時53分 盛岡 — 休屋

東北地方を襲つた台風の爪痕の景色を車内より観る。車内は食べ物のかすや新聞紙がいっぱい散乱している。この長い汽車の旅。

待ちかねの十和田南に14時35分着。

そこから京都では見かけぬ国鉄バスで休屋まで。途中、発荷時から十和田湖展望・広々とした湖をバツクに全員で記念撮影。

心配されていた雨もどうやらやんで、16時、休屋から1時間の湖上遊覧。青藍色の水面、遠く木間より見える乙女の像。私達はただその美しさに目を見張るばかり。

17時、十和田観光ホテルに着く。

前夜は、車中泊だつた為か、非常な疲れを覚えたが、この湖畔のホテルにてゆつくりと癒すことが出来た。

十和田 → 函館



2班 短食2の1

(宇治橋, 真梶, 曾我, 岩藤)
(上住, 佐々木, 坂部, 久保)

7月17日 (第3日目)

十和田湖畔での一夜が明け、今日は牛乳とアイスクリームの本場である北海道へ行けると思うと、胸が高鳴る。さすが東北だ。朝は涼しいのを通り越して、むしろ寒かつた。でもあの十和田湖の美しさが忘れられず、再び湖にそつて遊覧船の中から小さく見えた乙女の像まで歩き、ロマンチックな想いを抱かせた透き通る青藍色の湖水に別れを告げ、奥入瀬に向かつた。小雨がしとしと降り始め、バスの中から眺めた湖は、かすんでいて、いつそう私達をひきつけ、去り難い感じだつた。まもなく右に左にと濃い緑の樹木の間から、静閑さの中にも男性的な雄壮さや崇厳さを連想させる美しい滝。又それとは対照的に優美な女性的な滝、可愛い女の子を想わせる滝等、様々な装いをした滝が、或る時はやさしく、又或る時ははいねいに私達を迎えてくれた。うつそうと茂つた林の中に、白いしぶきを放